

主体 美術

SHUTAI-BIYUTSU

主体美術協会は、1964年に結成されました。
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の集団として積極的に活動していきたいと思います。
私達は世界的な視野に立って、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局

〒302-0001

茨城県取手市小文間4401-1

福田玲子方 TEL / FAX 0297(85)6665

2019.8 No.105

CONTENTS

1p 卷頭言 津田益夫

2~5p 特集

「絵画はどこへ行く…?!」

「絵画との半世紀」

..... 中川奈子

「タブローの魅力、観る喜び」

..... 種倉 紀昭

「金色の魅力」

..... 伊藤 博昭

「若者たちの絵画思考」

..... 山本 靖久

「越境してゆく『表現』」

..... 橋本 礼奈

6p 研究部よりお知らせ

第55回記念主体展 研究講演会

寺田 農 氏 講演

「父、寺田政明と

池袋モンパルナス」

第55回記念主体展

アーティストトークのお知らせ

7p 「主体創立55年を振り返って」

トークイベントのお知らせ

故 西村保史郎さんの壁画

ART WAVE

8p ●アトリエ訪問

「畠 理弘」アトリエを訪ねて

..... 石田 俊哉

9p ●「主体展 秀作作家(2018)と

会員小品展」報告

..... 山田 礼二

●SNSでの情報発信について

..... 久我 英輔

10p ●各地の美術展から

..... 丸谷 恵(秋田県)

●フォトエッセイ

..... 大庭 寛明(静岡県)

11p ●京都市美術館

リニューアル最新情報

..... 森 慎司

12p インフォメーション

展覧会記録

2019年第55回記念主体展日程

編集後記・その他

中島佳子「地の符・環」

感動を求めて

津田 益夫

地元の篠村八幡宮は室町幕府始まりの足利尊氏ゆかりの歴史を刻む神社である。境内には楠、椎、モチなど大樹が鬱蒼と繁る鎮守の杜がある。私はよく訪ねる。秋深まる頃、風が吹くとかさこそと微かな音が森のあちこちでおこる。ツブラ椎の実が落ちる音である。樹齢五百年は下らないであろう椎の大樹が、恐竜の皮膚のような根っこで地面を掴み、聳えるような樹冠からその実を落とす。子供の可愛い瞳の譬えの小さなツブラ椎の実、そのパラドキシカルな情景に私はうつとりとする。が、誰も気を留めない。子供さえも気付かない。

淡雪も残る春の気配が漂い始める頃になると、この森にも冬鳥が飛来する。中でも珍奇な客はトラツグミだろう。遠くアムール地方からやってくるとも、或いは近在の山深い森林に住む留鳥であるともいう。薄暗い樹下を好み滅多に人前には現れない。人の背丈よりやや上の樹間に飛び、降りたって地面を駆けるように移動する。立ち止まって頭を上げ回りを警戒する動作をくり返す。その間土中のみみず、小蟲を採餌しながら。薄い黄緑の

羽毛に虎の縞模様がくっきりと全身を覆い、目にしたときの見事さに息を呑む。黒い虹彩で睨むようにして森を跳梁する様に、私は何故か太古の人となつたような感覚を覚える。

広大な京都御苑の中にもトラツグミが現れて、夜間に啼く声に公家衆の住んだ当時は得体の知れない獸、鶴(ぬえと云う伝説上のいきもの)の声だと恐れられていたという。

何処にでもある平凡な鎮守の杜でのドラマに私は子供じみた感動を覚える。いまだにである。この彩りが私の生きている源泉となっている。私は随分と回りくどく生きて描いてきた。これといった意図や道程、成果もない。いまだにである。造形という二文字のキーワードのもと、何ものにも縛られないで自由闊達な気概を貫ける「主体」の精神は尊い。さまざまな人、もの、考えに影響は受けても、結局は自分とは、自分らしさとは何であるかである。空漠として。

特集

「絵画はどこへ行く…?!」

結論から言えば、絵画はどこへも行きやしない。太古の昔から今日まで、人のいるところ絵があった。これから先どんなに時代が変わっても、地球上に人類がいる限り、絵画は人々の前に在り続けるだろう。

しかし、21世紀になって久しい現在、絵画をはじめとする美術表現は様々に多様化して百花繚乱の様相である。

昔ながらの画家の領域はどうなっているのか？ 各世代の画家の言葉や若い世代の状況、論考などで、我々にとって絵画の魅力とは何なのか、あらためて問うてみたい。

「絵画との半世紀」

中川 奈哥子

押すな押すなの人の頭越しにその絵に魅入られた。1964年3月、大学の入試と発表の間のザワザワと落ち着かないある日のこと、ギュスターヴ・モローの「出現」を観ながら、大学に入ったら絵を描こうと思った。その年主体美術が設立されたことなど知る由もなかった。

初心者用絵の具セットを買い、上級生の手ほどきで初めて描いた油絵は、夜空に聳えるビル群の宙に浮かぶアグリッパだった。発想の基本は半世紀を超えた今も呆れるほど変わっていない。当時は漠然と、極めれば立体に行き着くと思っていた。ところが、我流で描いているうちに、多次元を2次元に閉じ込める面白さに取り憑かれてしまった。

美術部顧問の山田光春先生の薦めで4回展から出品、17回展で会員推挙を得た頃には描くことは生活の一部となっていた。一生描き続けられるテーマは何かと、生老病死、女であることなどを考え続けた。テーマを掲げ、連想ゲームのように言葉を重ねて絵を作っていた。頭に浮かぶ絵をカンヴァスに表現するだけの画力が無く、絵作りはとても苦しい作業だった。辞めたところで誰に咎められるわけでもなく、何故描き続けるのかと常に自問していた。

そんな辛い20年が過ぎた頃、父が癌に倒れた。凄絶な最期だった。恐らく鬱に陥ったのだろう、幻聴と幻視に襲われた。日本語らしき騒音に悩まされ、頭の中は巨大な絵ではち切れそうになった。その絵をラフスケッたら幻覚は見事に消えた。鬱症状も綺麗サッパリ消えた。以来無理な絵作りをせずとも、脳内に自ずと浮かぶ絵を掴まえカンヴァスに閉じ込められるようになり、描くことが俄然楽しくなった。自由になった。辛い20年は無駄ではなかったのだ。

43歳で念願のアトリエを手に入れ、介護付き老人ホームの寮母にでもなつたような気分は有りながらも幸せだった。

舅の浴室での溺死、実家の全焼、叔母（主人の実母）の子宮癌、色々あって50歳の時、介護に疲れて再び鬱になってしまった。鬱を抜け出すまでの15年、希死念慮に苛まれた私を支えたのは描くことだった。介護のイライラも深夜カンヴァスに向かうと鎮まるのだった。鬱という状態は様々な異世界を見せてくれる。三面鏡に囲まれた自分に怯え、螺旋階段を止めどなく降りていくその先は闇。画面に吐き出すことで危うい平衡を保つことができた。仕上がってしていく画面を分析して自分の深層心理を探った。

抗鬱剤を徐々に減らし、断薬に成功したかに思われたが、躁転して2度の長い入院を余儀なくされた。躁鬱病との付き合いも7年を超えた。幸い抗痉挛剤が良く効いて現在は落ち着いている。

2014年、私を応援してくれていた主人を癌に奪われ、断腸の思いでアトリエを手離した。今は4畳半で30号ばかり描いている。200号への未練はあるが、気の向いた時にボチボチ描くという気ままさが気に入りかけている。



ギュスターヴ・モロー「出現」

半世紀を振り返る機会を頂き、どんな時も絵画が私を支えてくれたことを改めて実感した。

いつまで描けるか分からぬが、今描いている絵が代表作という思いで描き続けたい。

「タブローの魅力、観る喜び」

種倉 紀昭

西欧名画には東洋の一般人にはあまり馴染みのない不思議な絵がある。その一例として、バロックの女性画家アルテミジア・ジェンティレスキ (Artemisia Gentileschi) の美しくもおぞましい「ユーディットとその侍女」(1614-20:油彩114×93.5cm) が挙げられる。この絵をイタリア、フィレンツエのピッティ美術館で40歳代に観た。絵を前に画架を立て模写している男性画家が居た。

ボッティチエリ、カラヴァッジョ、ルーカス・クラナッハ、クリムトも描いた旧約聖書外伝のこの主題を彼女も何枚か描いたが、この一枚に人気が集まる。

暗闇で剣を担ぐメディアの王女が豪華な身なりで画面の左中央奥にあり、そして、敵将ホロフェルネスの首を手籠に携えた侍女が画面の右半分から左下までの前景を占める。逃亡しようとする二人が画面右上の暗闇の或る気配に一瞬、振り返り、耳目の神経を集中し、緊張する様子の明暗構成と量感、動勢の描写が素晴らしい。王女の結い上げた髪、レース入りの白のブラウスや金の刺繡が入った黒の上着、鍛金の見事な剣を握る右手や表情の描写に加え、侍女のカバリ布と衣装の襞の明暗や材質感も重点的に描かれている。敵将の首はごく控え目である。

私は、美術館で気に入った絵の実物を目の前にして、画家の筆致、支持体や絵画地塗り、彩色層の重層的な構造を観察する。作家の息遣いや絵の経年変化をも実感する時、感動を覚える。同じ40歳代に、仏コールマールのウンターリンデン美術館でグリューネヴァルト「イーゼンハイム祭壇画」(1512-15)の油彩板絵の波打つ様に驚き、ルーヴルのレオナルド「モナ・リザ(ラ・ジョコンダ)」(1503-06頃、油彩)の展示場所の移動のため、床からの反射光で画面に浮き出た木目らしい縦の反射する平行線を確認したことがあった。マンテニヤの「パルナッソス(1497頃・ルーヴル、テンペラ)」には細部描写の面白さがある。

ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥールの辻音楽師を描いた一連の油彩作品(17c.)は、社会の底辺に暮らす人々に絵の主役を演じさせる。宗教画家・宮廷画家の屈折した人生観、世界観を感じる。

アンブロージオ・ロレンツェッティの「都市と田園の善政の効果」(シエ



アルテミジア・ジェンティレスキ「ユーディットとその侍女」

ナ公会堂フレスコ壁画14c.)、張擇端の「清明上河図」(24.8×528.7cm、絹本、北京・故宮博物院、12c.)と狩野永徳筆上杉家本の「洛中洛外図屏風」(六曲一双、紙本、160.6×364.0cm山形県米沢市上杉博物館・国宝、1560年代)は、いずれも風景画・風俗画の逸品である。

ゴッホ、クレー、ブラック、マティス、マックス・エルンスト、ボナール、ピカソ、シーレ等の作品には古典絵画とは異なる彩色層の処理がある。混色や線描、空間構成力の面白さに、興味が尽きない。徳島の大塚国際美術館は西欧画の古今の傑作が複製でも実物大で多数あり、実見した時の体験が錯覚にせよ蘇り、大変に見応えがある。

「金色の魅力」

伊藤 博昭

私は他の方の描いた絵を鑑賞するとき、まずその技術的な部分に、先に目がいってしまう癖があります。「この技術は理解できるが再現は難しそうだ」「この技術はあれでうまくいくんだろう」「実際に巧みだ」「執拗に筆を加えているこの部分が作者には何かあるのだろう」などと広がっていき、ゆくゆくは自身の絵画制作に取り入れられる技術は盗む気持ちでしっかりと心に刻んでおこう、と思っています。

そういった、やや不純しかし絵画を制作する者としては自然な行為、観点で他の方の絵を見て、この絵が気になりますと、特筆して一作品取り上げるとするならば、私はグスタフ=クリムトの描いた「アデーレ・ブロッホ=バウアーの肖像」を取り上げたいと思います。クリムトを代表する有名な作品の一つですので、説明不要かと思いますが、別名「黄金のアデーレ」と言われているように、画面を覆い尽くさんばかりの金色のあの作品です。

私は子供の頃から金色が好きで、現在描いている絵にも金色をよく用いることがあります。金箔や金泥、絵の具の金など様々な金を用います。金色に光っているように描写での再現も行いますが、見る角度で様子が変わると、金そのものに強く興味があり、それをうまく作品の中で扱いたいと思っています。クリムトのこの作品は、マチエルなどを巧みに扱い、金の魅力を最大限引き出しています。残念ながら私はまだ実物を拝見したことが無く、映像でのみ、その作品の魅力の鱗片を覗うに留まっています。以前複製画を扱う美術館でこの絵のレプリカを拝見しましたが、どうしても再現度が低く(マチエルと金の種類がぴったり合致していないだけ



グスタフ=クリムト「アデーレ・ブロッホ=バウナーの肖像」

れば再現不可能なことからも明らか)、より一層、実物が見たいと強く思ったのでした。

私は今年の春に地元で個展を開きました。閉館時間を過ぎ、照明を全て消していただいた後、私は自身の絵の、金箔を貼った部分だけが光を蓄積し、怪しく光を放し返しているのを見ました。ますます金の力に心奪われた瞬間でした。

「若者たちの絵画思考」

山本 靖久

現在、私が美術大学の教員であることから、若者たちの絵画の傾向について書いてほしいという依頼があり、あくまでの私感であるが記したいと思う。

まずは確認も兼ねて美術大学の卒業制作展やアーティストを目指す若者が出品するシェル美術賞やFACE展、上野の森美術館大賞展などを観て廻った。

感想は、世界のアートシーンや市場的なアートムーブメントを意識下において制作している者もいるが、それとは関係なく、様々な表現方法（絵画、インスタレーション、映像など）で制作する。特に絵画を志す美大生や若者たちは、あくまでも個人的な生活に根ざした思考で作品を制作し、大きな傾向の様なものは感じられない。そして、その情報の豊かさから方法論やテクニックは、非常に器用で上手いが、決して作品の巧拙だけに価値を見出さず、等身大の自己発信をしているという印象を持つ。

彼ら、彼らを象徴するアニメやSNSなどのメディアは、正しく生活そのものであり、ある学生はスマホを自分の内臓と話す。ただそのような新しいメディアを感じさせるアニメ的な絵画を思考する者ばかりでもない。あくまでの自分の感性に合致する情報収集のツールとしてスマホやPCを利用する。そして、我々と同様に育ってきた環境が表現の根源となっていて、その作風は様々である。

では具体的にはどの様な作風かというと、観察を基にした写実的な

絵画も未だ描く者も多く、ホキ美術館などに収蔵されている人気作家への憧れを感じられる。また目を覆いたくなる映像が氾濫する昨今、自己の内面世界を赤裸々に表す者も少なくない。そしてどの世代にもあったその世相を自己の視点で表す者、個人の生活（昔は恥ずかしくて見せられない場面）を露わに見せる者、描くことへのアンチテーゼ（再現性を目指すのではなく、絵具の筆致やストロークに価値を見出すなど）として、絵画の可能性を模索する者、勿論抽象的な表現も多岐に渡って見ることができる。

ネット環境により情報が簡単にそして大量に手に入る現代という時代の特色はあるが、その時代と呼吸しながら生きる画描きという観点からは、今も昔もその有様は、変わりはないのではないか。育ってきた時代は違うが、我々も現代に生きていることには変わりなく、若者が育ってきた環境も共に体現している訳であるから。

情報がスマホを通じてごく個人的に入ってくるからこそ、その選択肢は更に個人的になり、表現も多岐に渡る。しかし表現することは、個人の枠から他者や社会との接点を持ち、具現化した作品を誰かに理解して欲しいという現れであると思う。コミュニケーションという言葉も頻繁に使われる現代だが、人々画描きは言葉にできない想いを、内に隠って一人で作品に定着するということであれば、素直な想いを発信し、コミュニケーションを求めている若者の声にしっかりと耳を傾け、その感性をしっかりと受け止めるだけの許容量を持ち得ないと主体の未来は到底築けないと思う。

「越境してゆく『表現』」

橋本 礼奈

先般「海獣の子供」というアニメ映画を見てきた。一番大切な事は言語では伝わらないというテーマそのままに、後半のシーンは溢れるイメージの連続で物語を直感的に刻みつけてくるような斬新な作品だった。昨今、新海誠や細田守作品を筆頭にあたかもポストジブリの座を競おうとするようなスケールの大きなアニメ映画が目白押しになっていると感じる。どの作品も絵の持つ熱量たるや、目をみはるものがある。それらを見て育っているためか、途方もなく巧い絵を描く人、特に鋭さを持った若者や子ども達は昔よりずっと多くなった印象だ。

中学生の娘も美術部に入って、よくコンクールや展覧会に付き合わされるが、みんなよく研究してるし、姿勢も前向きだ。私も個人的にここ2年ほど若い頃の趣味が再燃していわゆる同人漫画を描いている人々との交流を持つようになったが、ここでもお互いに評価をしあって、どうやったらより魅力的な絵が描けるか多くの人たちが研究したり競い合ったりしている。自主的にデッサン会を開いているグループもある。ただとりわけサブカルチャー界隈の年若い人たちには、自分たちの考える「絵」の範囲が狭い事をあまり意識していないことが多い。風景画を発表するとなぜか「背景」とタグ付けされる。イラストSNSの閲覧数が多いのは相変わらず、たいていアニメ風の美少女が描かれたものだ。

そうかと言って現状、アニメが盛り上がって「（所謂）絵画」が衰退しているわけではない。あの世界では「絵」で物語や世界観を伝えるし。展覧会を主戦場としている我々がもとより考えてきた「絵画」では、「絵」で自分自身を伝える。目的が違っていても互いに影響を受けあって、表現の力を高め合っていくものだと考えている。画廊や美術館の壁以外のところでも「絵」で何かを伝えたいと願う人々が今もたくさんいるということだ。

SNS等で伝わってくる感覚としては、かれらは映画を見たりスマホで画像を共有するのと同じくらいの気軽さで、イラストもデザインも古典も現代作家も展覧会に出かけるし、何の前置きもなく「絵」を共通言語としてフラットに捉えているという印象だ。いまどきは風景画や静物

画なんか必要とされていないのではないか？…なんて話ではない。自分たちは自分たちで、絵という言葉で誰に向か何をどう伝えるのかをしっかりと示し続けていられれば、媒体や時代の変化はそんなに大きな問題だとは私は考えない。

冒頭、ポストジブリについて少し話したが、自分は最近の劇場アニメ作品には素晴らしい絵が描けていても、物語の説得力や全体の構成力で往年の高畑勲、宮崎駿作品を追い抜いているものをまだ見ていない気がするのだ。大切なのはこの後に色々な分野において絵を用いた表現を試みていく人たちに、絵画のフィールドに居る私たちが蓄えてきた、絵画の持つ語る力の多様さ、幅の広さを伝えていくことだと思っている。



2019年東京五美術大学連合卒業・修了制作展より(次頁も同)



主体美術55周年記念 研究講演会2019

寺田 農(てらだ・みのり) 氏 / 俳優 「父、寺田政明と池袋モンパルナス」



寺田 農(てらだ・みのり) 俳優

1942年東京生まれ。映画、ドラマなど多数出演。
元、東海大学文芸創作学科教授。現在、板橋区立美術館運営協議委員会会長。

主体美術協会・研究部

主体展会場にて「寺田政明没後30年・吉井忠没後20年」特別展を開催いたします。

主体美術55周年記念

アーティスト・トーク ▶ 会場研究会



▲54回展でのアーティスト・トーク



▲54回展での会場研究会

主体展会場での会員によるトーキングイベントです。現在の会員作家の仕事、その表現をよりわかりやすく鑑賞者にも紹介したいという趣旨です。今年も会期中2回に分けて行います。トークはひとり15分、その場で来場者との簡単な質疑応答もします。その後は時間の許す範囲で会員・出品者相互の会場研究へと移ります。ふるってご参加ください。

**9月1日(日)
11:00~12:00
主体展会場**

●担当会員

柴田かよ子
水村喜一郎

※午後から講演会が開催されますので、アーティストトークは午前中の開催になります。

**9月8日(日)
14:00~15:30
主体展会場**

●担当会員

續橋 守
坪井健一
前山陽子

主体美術55周年記念

「主体創立55年を振り返って」

今年は主体美術創立55周年となりました。1964年8月、自由美術家協会を退会し新たなる出発を決意したのは東京在住の会員を中心に38名。同年9月、当時九州在住だった中村輝行氏も参加しました。12月には都美術館使用許可が出て、第1回展は1965年です。矢野利隆氏は2回展で会員となりました。会の歩みは30周年、50周年のパンフにおいて記されていますが、今回のトークは単に会の歴史を振り返るという硬い内容ではなく、お二人にこの55年心に残っているエピソードや思いを、ざくばらんに語っていただけたらと思っています。活字では伝わらない生の声を是非受け止めて下さい。

語り手、聞き手が一体になれるよう車座になり、質問などしやすいように心掛けたいと思っています。

どうぞ会員歴の浅い方、出品者の方々、積極的に参加して下さい。お待ちしております。

研究部 榎本香菜子

■9月15日(日)15:00~

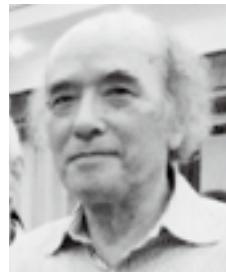
■美術館スタジオ

(ミュージアム・ショップ右のエレベーターを利用し2階へ)

語り手 矢野 利隆



中村 輝行



小田原市民会館の壁画は 故・西村保史郎さん (1915-2015)の作品だった。

6月24日、小田原市役所文化部から、市民会館の壁画にYASUSHIROU NISHIMURAのサインがあり、主体美術の故・西村さんでしょうかという問い合わせのメールが入りました。1962年開館以来、長らく作品として意識されていなかったようですが、市と市民団体が小田原市の所蔵する美術作品確認作業を進めていく中で、会館大ホールの1階、2階の壁画が西村保史郎作であるとわかったようです。会館の老朽化にともない取り壊しも決まっているとのこと。ご家族もすでに皆亡くなり西村さんと小田原市との接点は何もわかりません。

7月12日、壁画を見に伺いました。1階ロビー正面はほぼ22m、深い赤。2階は14m青。重厚なマチエールと色合い、まさに西村さんの作品でした。壁のクロスに直接、下から天井まで全面塗り込み大変な作業だったと察します。

亡くなられて4年後、57年ぶりに思わず地で西村さんの作品に對面し、感無量でした。お元気だった頃を思い出し、何やら嬉しくもありました。もし、どなたか、西村さんと小田原との繋がりをご存じの方がいらっしゃたら、ご一報下さい。

(事務局)

西村保史郎氏プロフィール

1915年東京生まれ。
1936年太平洋美術学校卒業。
1949年自由美術家協会会員。
1964年主体美術協会創立に参加。
2015年10月逝去(100歳になる1週間前でした)
資生堂ギャラリー、フルム画廊、サエグサで個展。
グループ展多数。
児童書の挿絵も多数手がけ、PCで検索可。



▲1階大ホール正面の壁画。出入口が4カ所あります。赤を基調にダイナミックな構成です。床のタイルの色も壁画と調和していました。



◀2階のロビー壁画。絵具をかなり盛り上げた部分もあり青い抽象画は主体出品作品にも通じる表現でした。



アトリエ訪問 vol.4

「畠 理弘」アトリエを訪ねて

鹿児島県奄美市

取材・文／石田俊哉

構成／藤田俊哉

2019年2月24日から奄美大島の田中一村記念美術館企画展示室にて「奄美・横浜交流遊展」(續橋、石田、藤原、鈴木、遠藤で出品)というグループ展を行い、合わせて奄美在住の畠さんのアトリエに石田、藤原の2名で訪問しました。そこは広くてとてもいい空間でした。

(石田)



私のアトリエは市内の繁華街の中にはあります。酒場、カラオケ、スナックが立ち並ぶ一角です。夜は賑やかで窓を開けると饅屋の台所、昼夜時は香ばしい香りがアトリエに満ちます。60歳を過ぎた頃より「目覚めてから寝るまで絵を描きたい」…その思いが強くなり、故郷に帰ったと言うわけです。朝は8時~9時より、夜は12時~1時頃まで制作の日々です。絵の教室も兼ねていますので思い通りにはいきません。途中の絵を眺めたり構想を練ったり、CDを聴き本を読んだり、昼寝もしたり気儘です。広さ8×8メートル、高さ2.8メートルのアトリエはそのための十分な空間です。

(畠理弘)

■畠さんのこれまでの経歴についてお教えてください。

大野五郎先生が主催する赤羽美術クラブで日曜日に裸婦デッサンを勉強しました。その後グループ「雑草」のメンバーと知合い板橋の寺田先生宅を尋ねました。自分には師匠が二人いると皆さんには、言っています。

■普段の制作に関する事をお聞かせ下さい。

今は奄美に関する植物だとか貝殻を中心に幻想的に画面を組み立てています。もう一つは、スペインのリアリズムの作品を見たこと。衝撃を受け考えが変りました、思考、題材、技術についてより深く考えるようになりました。

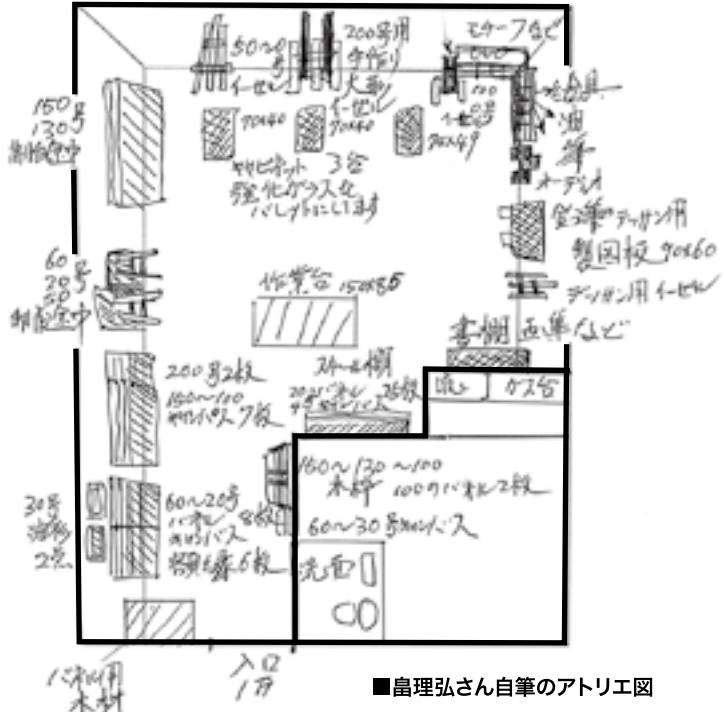
離島に住んでいると絵画の運送問題があります。昨年は、大きな作品が出品出来ませんでしたが、あっちこっちの運送屋さんに連絡してようやく搬入。作品が損傷しても保障は無いという条件であれば、大きな作品でも運んでもらえるそうですが…

■絵を描くようになったきっかけはいつ頃ですか？ また、きっかけは何ですか。

親戚の大学生で絵を描いている方がいて、その方が奄美にきて彼の絵具箱を持って一緒にスケッチをしたり、油絵の手解きを受けたり熱心に教えてくれた。小学校4年の時、学校の教師に絵が旨いねといわれていた。17,8歳の頃に吉祥寺に東洋画材があり当時ボクシングや空手をやっていて…。道場に行く途中に何気なく画材店を見たらセールをやっていて、たまたま2万円ほど持っていたので思わず画材を買ってしまい、買った以上はもったいないので、奄美にいた時に親戚の人に油絵の描き方を教わっていたのを思い出し描き始めました。

■影響を受けた画家、尊敬できる画家を具体的に挙げてください。

尊敬できる画家は、大野五郎先生、寺田政明先生。絵を描いて生きる



■畠理弘さん自筆のアトリエ図

事、その姿勢など教わったと思います。

影響を受けた画家は、スペインのエドゥアルド・ナランホ、ホセ・エルナンデス、アントニオ・ロペス・ガルシア、イギリス・ラファエル前派の画家、ウィーン幻想派の画家。日本では横尾龍彦。

■絵を描く上で好きな言葉はありますか？

「死ぬしかないと思う人を救うのが芸術だ」…この言葉に納得しています。

■作品づくりの技法や材料のごだわりを教えてください。

ルフランのオイル、シッカチーフ(コパール樹脂系)始め、各種樹脂やオイルの配合に拘って手製のオイルを使っています。支持体のパネル作りやキャンバスの地塗りも同様です。また筆は特に気をつけていて、面相筆を6種類ほど使っています。

■何を大切に作品作りをしていますか？

発想から仕上げまで全部を大切にしています。

■主体展の魅力は

主体展以外よく分かりませんが、わきあいあいとして、とてもいいと思います。人間くさいようで反面人間くさくない。人は群れたがったり派閥を作りたがったりするが、それが無いのがいいと思う。

自分が出品していた30~40歳ぐらいの頃、展覧会があると、必ずどこかに集まっていて、会員(先輩)も出品者も関係なく飲んでいました。いつの間にか、あれっと気がつくと勘定が終わっていて、会員(先輩)が払っていてくれていたり(大概が割り勘でした)。誰とでも気軽に喋れて、先生と呼んだら「僕は君の先生では無い」といわれた、そういう所が主体展の魅力だと思います。

「主体展 秀作作家(2018)と会員小品展」報告

山田 礼二

ヒルトピア アートスクエア 新宿区西新宿6-6-2ヒルトン東京地下1F
2019.1.31(木)~2.11(月) 11:00~18:00



▲秀作作家展の展示室(一部)
◀展示室のエントランス
仕切りの手前左が小品展のスペースになっている。



▲会員小品展の展示室

ヒルトン東京地下1階のヒルトピアショッピングアーケード内にある「ヒルトピア アートスペース」にて、主体展秀作作家(2018)と会員による小品展が開かれた。2018年9月の本展期間中に開催の打診を受け、翌年の1月末に開催と、非常に短期間に話が進んだ。参加人数は、会員58名、秀作作家12名全員。急な話で参加が難しい会員もいたが、当初の予想以上に参加が多く若干の窮屈さはあったものの、近隣の会員の協力で無事に展示することができた。DMやポスター作成、搬入搬出、展示作業に関わった皆さんに感謝したい。

秀作作家展は本出品作品以外の大小作品もあり、意気込みが感じられた。小品展は販売を前提としたこともあって、大作とはまた違ったイメージの作品を見る事ができ、小品ながら活気のある場になったと思う。

昨年、名古屋展が会場の都合で開催できなかった折にも、将来構想委員会の方で地方での企画展ができるいか検討していたが、たまたま今回こういう形で開催できたことで良い経験になった。運営は大変だが、今後会員の少ない地方での開催が望まれる。

SNSでの情報発信について

久我 英輔

主体美術協会の紹介や、新規の出品者への広報手段として、将来構想委員会からの委託を受け、事務局としてソーシャル・ネットワーク・システム(以下、SNS)活用の可能性について、この1年間検討してきました。ここにその報告をさせていただきます。

はじめに、事務局の若手会員として私を中心に情報発信手段として適当と思われるSNSについて、国内における世代ごとの利用状況を調べました。Twitter、Facebook、Instagramでは、それぞれが年代ごとに利用者数の比率が異なり、Twitterは40代、20代の利用者が多い。Facebookは40代、50代の利用者が多く、10代の利用者が極端に少ない。Instagramは30代、40代、20代に利用者が多いといった特徴が見られました。

昨年度の事務局会議でも、これら3つのポピュラーなSNSを情報発信手段として用いて、多くの年代の方の目に「主体展」の情報が触れる機会を作りたいという話は進みましたが、いざ主体美術協会として公式の情報発信を行う場合、写真に写った作品の著作権や人物の肖像権、レセプション等の画像を掲載する場合の防犯上の問題等が課題として挙がりました。また、掲載する情報を校閲する手順や、SNS担当の係が担う業務についても厳密な指針が必要であるという指摘が出ました。そのため、次回の検討資料として、主体美術を除く、他の27の公募団体のホーム

ページから、どのような形でSNSを用いているのかを調査したところ、以下の結果が判明しました。

ホームページにセキュリティポリシーを掲載しているのは7団体、SNSを利用しているのは6団体、スマートフォン用ページを作っているのは8団体。また、これらの公募団体においては17団体が支部を設けており、支部がSNSを使って情報発信をしているということもありましたが、多くの公募団体ではSNSについて本格的に利用をしていない状況が分かりました。

このことを踏まえて、今年2月の事務局会議で再々度検討した結果、主体美術協会として公式の情報発信手段としてSNSを用いることは好ましくない、それよりSNSをすでに利用している会員・出品者の方に主体美術のことを取り上げて発信してもらうことが効果的ではないかという結論に至り、将来構想委員会に報告しました。

SNSの利点である双方向の情報発信や、会員・出品者個人の視点から、主体美術協会を取り上げていただくことで、魅力ある公募団体として認識を増やしていくければと思います。SNSを利用されている皆様には、また御協力ををお願いいたします。

各地の
美術展
から

秋田で出会える絵画

丸谷 恵（秋田県）

秋田の絵画の筆頭といえば、江戸時代後期に発展した洋風画・秋田蘭画です。その中心人物、小田野直武筆の最高傑作とされる「不忍池図」（重要文化財）は、静かに広がる上野・不忍池の風景をバックに、鉢植えの大輪の芍薬を手前に大きく描き、その芍薬に黒蟻数匹まで描き込んでいる作品です。

その小田野直武とは、安政2年（1773）夏、阿仁銅山開発のため秋田藩に招聘された博物学者・平賀源内が旅の途次、寄宿した角館で偶然に画才のある角館藩士・直武を見出し、洋画法を伝授。その後江戸に戻った源内の後を追うように、直武は「銅山方産物吟味役」という、おそらく表向きの藩命を受けて江戸へと上り、源内のもとで洋画修行をすることに…。直武25歳の秋のことです。

安永3年に刊行された杉田玄白訳「解体新書」が出版されるや、この本の附図を担当したのが前年に上京したばかりの直武でした。

その後はほとんど江戸に住み、洋風画の技術を進歩させてゆき、新しく得た知識や技術を、参勤のため江戸に来る秋田藩主・佐竹義敦（曙山）、角館城代・佐竹義躬らにも伝え、秋田藩士らも巻き込んで、秋田蘭画として花開きましたが、直武31歳の若さで急逝し、活動期間は6年間に過ぎませんでした。

現在作品を所蔵する横手市の秋田県立近代美術館では、毎年必ず一度はこの作品を無料公開しています。本年もコレクション展第一期「眼と手」と同時期間の前期4/10~5/24まで直武の「不忍池図」、後期5/25~7/7まで「岩に牡丹図」が無料公開されています。

また秋田市の県立美術館では、藤田嗣治の「秋田の行事」を常設展示しているほか、藤田の1930年代の作品を中心とする平野政吉コレク



「不忍池図」 小田野直武



「花」 岡田謙三

ションの企画展も開催しています。

次に紹介したいのは、平成元年に開館した秋田市立千秋美術館（愛称・アトリオン）です。企画展や秋田ゆかりの作家の収蔵品を順次常設展示しています。特に開館と同時に岡田謙三記念館も併設しています。

岡田謙三（1902~1982）は横浜市生まれ、東京美術学校に入学、その2年後パリに留学、海老原喜之助の紹介で、藤田嗣治のアトリエを何度も訪ねていて、エコール・ド・パリの中心人物とも交流。この時の藤田との出会いが生涯の親交に繋がり、後に秋田市の平野政吉美術館で藤田作品と出会った岡田夫人きみ氏によって、岡田の作品100余点を藤田のそばにとの思いで秋田市に寄贈することを決意したのです。

岡田はパリ帰国後、二科会に所属し、都会的なセンスと叙情的な雰囲気を持つ女性像で人気作家になるも、48歳で渡米し抽象表現の盛んなニューヨークに住み、2年後ベティ・パーソンズ画廊で個展を開き、日本の美意識を基底にした独自の抽象画・幽玄主義（ヨーゲニズム）が脚光を浴び、ヴェネチア・ビエンナーレなど数々の国際展で受賞を重ね、国際的作家として高く評価されました。

フォト・
エッセイ

富士山麓の田舎暮らし

大庭 寛明（静岡県）

東京、豊田市、名古屋、カルフォルニア、東京、名古屋と転々として8年前に富士の裾野に戻ってきた。70年近く前の幼少時代を過ごした場所だ。終戦を迎えたのもこの土地だった。小学校の校庭は、爆弾で鉢状の大きな跡ができて、その穴の斜面に沿って体を斜めにしながら競走しこともあった。その穴は、後でさつまいも畑に開墾されてしまった。当時、近くを蒸気機関車が走っていてトンネルに入ると、どんなに暑くても一斉に窓を閉める。そうしないと煙で顔が煤だらけになる。そんな事をよく覚えている。

ここ富士の麓、裾野市は人口54000人で御殿場市と三島市の中間にあり、標高70mから2000mと高低差のある地域だ。標高の高い場所ではソバ畠があり、低いところではモロヘイヤや大和イモ、イチゴ、お茶などが栽培されこの地方の名産になっている。春になると富士を背景に菜の花が一斉に咲き、秋になるとコスモスの花が咲き広がるパノラマロードは、裾野市から眺める富士山の絶景ポイントの一つだ。

最近、静岡県東部の御殿場市、富士市、富士宮市、裾野市、小山町で車のナンバープレートのデザインが募集され、住民投票の結果私のデザインが採用されることになった。見上げれば富士、裾野に広がる豊かな大地。美しい花々に囲まれた潤いある田園風景。このようなコンセプトが受け入れられたものと思われる。

自宅から見る富士山のほぼ中央には宝永山のくぼみが見える。これは1707年（宝永4年）に噴火が起き三つのすり鉢状の火口が生まれたものの一つだ。見る場所を少しずつ北東にずらしていくと宝永山も左側に寄っていく。一方、新幹線で富士市から見ると右端にこぶのように見える。この宝永山の位置でどのあたりから撮影したのか見当がつく。富士山の色は季節により変わる。



冬の朝早く太陽に照らされて赤く染まっていく赤富士は、時折はっとさせられるほどに美しい。そして刻々と変わっていく姿を眺めるのも楽しいものだ。

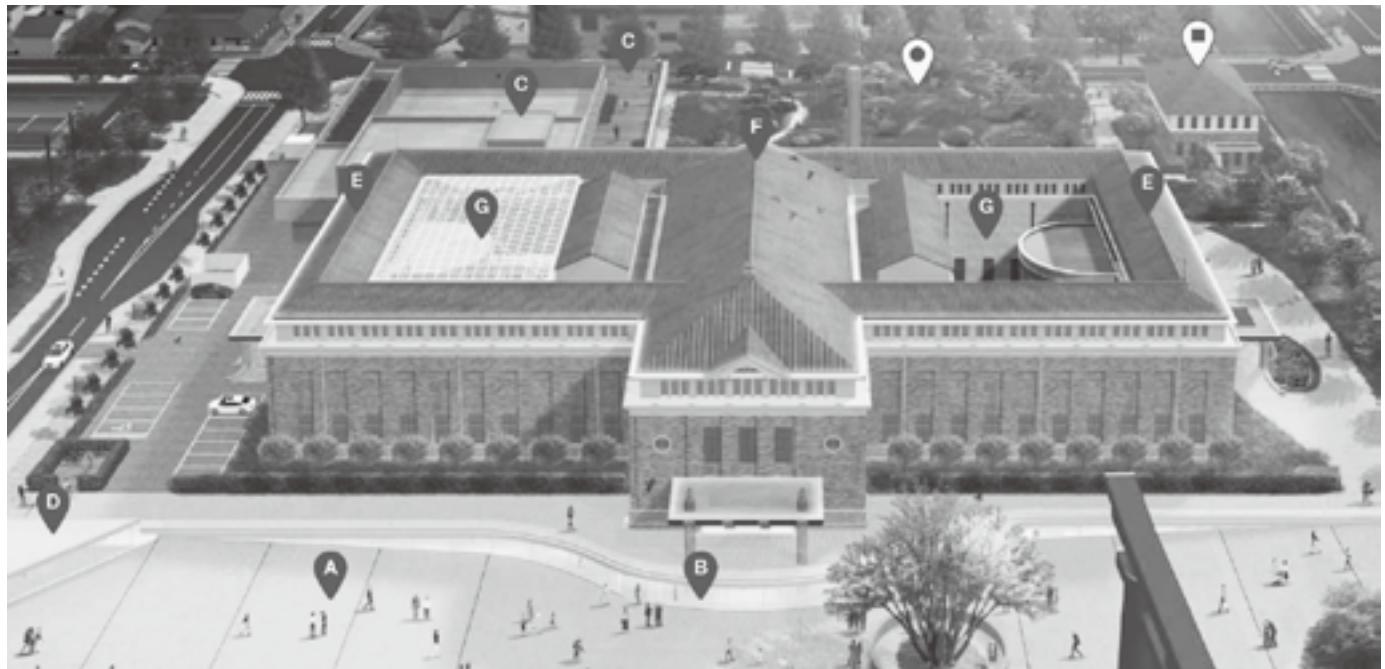
春はカスミがたなびいてぼんやり薄く見えることが多く、夏は雪が解け荒々しい形になり、夕方は雲に隠れることが多い。この住民は富士にかかる雲の形で天気を予測している。傘のような雲が富士の上空にあると雨が降るので農作業を早めに切り上げたりする。これがまたよく当たるから素晴らしい。生活の知恵だ。

我が家も、狭い畠に少しの野菜とミカン、プラム、柿、ぶどう、ザクロ、お茶などがあり、季節ごとに収穫し、加工することを楽しんでいる。ゴルフをやりたければ15分もあればゴルフ場に着く。昨年は、ストーブ用の薪づくりに3か月程かけて6年分の薪を用意した。冬の暖房は、ほとんどこれに頼っている。

私は、朝目覚め窓越しに見る富士の表情に一日の初めを感じる。私にとって富士山は生活の一部であり、希望と勇気。気持ちに潤いと生存している安堵感をもらえる山である。私はそんな田舎の生活に結構満足している。

京都市美術館リニューアル最新情報

森 慎司



一般名称が京都市京セラ美術館となる現京都市美術館は、2020年3月より順次オープニング記念展が美術館企画として開催されます。

主体美術は第2回展から52回展まで京都巡回展を開催してきましたが、3年の神戸開催を経て2020年第56回展から再び京都巡回展として9月29日から10月4日の6日間会期で行われる予定です。

このレポートを書いている2019年6月時点ではまだ本館は工事用遮蔽のなかで、外観は公開されていません。いずれにしても今年いっぱいは見ることはできなさうなので、京都市の発表している計画内容から巡回展に使用する会場近辺を紹介したいと思います。

本館全体の外観イメージはイラストのとおり変わりませんが、内装は大幅に手を加えるようです。おおむね元に戻すとしても南側事務室の扉や壁がはがされている様子が特設HPに載っています。

さて、ではHPに載っているパース絵と関係者に配られている平面図を照らし合わせて主体展の展示会場に至る導線をたどってみたいと思います。

外観上もっとも変化しているとおもわれるのがエントランスです。美術館前の広場というか庭というか、が大きく削られて京セラスクエア(A)と名付けられたスロープになり地下階のエントランス(B)に至る構造になります。ガラスリボンと名づけられていますからガラス壁構造が地下部分に広がり、その上に美術館の重厚な構造が乗っているという新旧折衷デザインになります。雨が降れば京セラスクエアに降った水はガラスリボンめがけてなだれ落ちるわけなので、排水大丈夫なんだろうな、といつい心配してしまうわけですが、まあさすがにそれはなんとかしているのでしょうか。

平面図で見ると、従来のエントランスからすぐの大階段(2階に上がるメインの階段です)がそのまま載っていますが、これをつかって地下階から1階にあがりさらに従来の大階段で2階にあがると想像すると、ちょっと導線が悪いような気もします。

従来使われたことのなかった二か所の中庭というのがあって、ガラス天井を付けて、光の広間・天の中庭(G)と名付けたこの中庭は各会場へのハブとしての空間になるのかなと思います。ちなみに従来は閉鎖されていた構造で1階と2階をつなぐ半円状の階段があって(トイレがあった場所)石のステップで木製の彫刻が施された立派な手すりがついていて魅力的な階段ですが、これを使って2階へアクセスできるならなかなか素敵ではないかと思います。この階段は私が若いころ通っていた大学では毎年美術館本館を全館使用して制作展をしていて、その搬入出の際にこの階段をつかって作品の上げ下ろしをしています。



(B)地下階エントランス
「ガラスリボン」

地面のレベルをガラス屋根(?)で仕切られて、水中にいるような、浮遊感のあるエントランスです。(編集部)



(E)南回廊

たぶん漆喰の白い壁、自然光が差し込むのは嬉しい。しかし天井が暗い色で低くなるのでしょうか、以前の優雅なカーブを描いた高い天井が懐かしい…。(編集部)

したが、なんとも明るく魅力的な空間で好きだった記憶があります。

会場にどの部分から入るかは別として、主体展巡回展会場は南回廊2階(Eですが南は絵の右側)です。壁面や部屋を仕切る木製扉、自然光による採光など、従来通りの会場環境になるようです。

さて、主体展の鑑賞を終えてまだ時間があるので、東山キューブ(C)に行きましょう。この構造は現在のところ主に収蔵庫と会議室に使われていて導線はないと言っていいですが、東山キューブにおいては現代美術展示に使いやすいギャラリーと収蔵庫が設置されるということなので、本館と繋がることでしょう。繋がると信じています。そういうするうちお腹がすいてきました(笑)。展覧会って疲れるからやだ、という気持ちが湧いてこないよう、敷地内のレストランに向かいましょう。美術館の南東角です。レンガ造りのおしゃれな小さい建物、桜水館(■)があります。だが残念、2020年の巡回展ではここは閉鎖されているはずです。従来ここは美術館事務所で、本館オープンとともに東山キューブ内に移動するようなので、つまりそれからの改修工事となるため、レストランオープンは1~2年後のことになります。それまでは仕方ないので道を挟んだ京都市動物園のレストランに向かうことにしましょう。

なんかもう展覧会以外のすべてを見た気になってしまいました。あー疲れた。

展覧会記録

2019年1月末～2019年7月末

■主体展秀作作家(2018)と会員小品展

- 1月31日～2月11日
ヒルトビア アートスクエア(新宿)
■林哲生展
2月8日～2月20日
ギャラリー睦(千葉市)
■樋の会展(石井晴子 他)
2月11日～2月16日
ギャラリー睦(銀座6)
■アトリエ展(青木充子、茨木信夫、梅沢洋子、車崎典子、小林智江子、千秋 節、前山陽子、三橋編弓、山田信一、渡部尚子 他)
2月11日～2月15日
上野の森美術館(上野公園)
■第16回冬期ミニチュア100人展
(伊藤明美、水谷幸子、水野博子、毛利惇子 他)
2月12日～2月24日
Gallery名芳洞(名古屋市)
■田中和枝挿絵原画展
2月14日～2月28日
豊田市中央図書館(豊田市)
■第6回Femmes展(井上樹里 他)
2月25日～3月7日
高輪画廊(銀座8)
■見藤瞬油彩展
2月26日～3月3日
ポートビアギャラリー(神戸市)
■弥生の空にpart.I(井上樹里 他)
3月4日～3月16日
始弘画廊(南青山)
■素敵なサムホール展(桑原雄一 他)
3月5日～3月10日
Gallery 美庵(銀座8)
■第51回主体美術神奈川作家展
3月5日～3月11日
横浜市民ギャラリー(横浜市西区)
■第2回 流の会展(續橋守 他)
3月6日～3月12日
ヒルトビア アートスクエア(新宿)
■柿崎覚油絵展
3月6日～3月12日
阪神百貨店(大阪市)
■視点^{（鼎の眼）}展(山本靖久 他)
3月11日～3月17日
あかね画廊(銀座4)
■島田邦麿はなみ展
3月12日～3月17日
ギャラリー勇斎(奈良市)
■第9回輪展(長沢晋一 他)
3月18日～3月23日
銀座K'sギャラリー(銀座1)
■表現の原点 -素描-(藤田俊哉 他)
3月18日～3月23日
ゆう画廊(銀座3)

※展覧会案内状を機関紙担当(山田)、ホームページ担当(長沢)にお送りください。(会員・出品者問わず掲載いたします)

2019年 第55回記念主体展

本 展／東京都美術館(上野公園)

2019年9月1日(土)～9月16日(月)15日間
9:30～17:30(最終日は14:30まで)9/2(月)休館

公募搬入／2019年8月22日(木)・23日(金)

東京都美術館バックステージ 地下3階

神 戸 展／原田の森ギャラリー

2019年10月2日(水)～10月6日(日)5日間

10:00～18:00(最終日13:00まで)

名古屋展／愛知県美術館8F

2019年10月22日(火)～10月27日(日)6日間

10:00～18:00(金曜日20:00まで、最終日16:00まで)

※いずれの美術館も入場は閉館30分前まで

■寺田政明展 一描く故に我ありー

前期:4月2日～5月12日
後期:5月14日～7月12日

北九州市立美術館(北九州市)

■山田礼二小品展

4月6日～4月14日

ギャラリー伊達(福島県伊達市)

■モノクローム展

(柏木喜久子 他)

4月8日～4月13日

STAGE-1(銀座1)

■花衣 三人展

(榛澤キヨ子、川端みち子、荒木篤子)

4月18日～4月26日

GKギャラリー国立(国立市)

■詩魂の画家 一村喜一郎展-

4月21日～6月2日

小諸高原美術館(長野県小諸市)

■伴幸治個展

4月29日～5月4日

新井画廊(銀座7)

■現代絵画シリウス最終展

(長沢晋一 他)

5月3日～5月8日

O美術館(品川区大崎)

■松尾陽子「インスタレーション」

5月5日

ギャラリー&工房ボ盧ボ盧(京都市北区)

■水戸部千鶴展

5月6日～5月12日

画廊「樂」II(横浜市中区)

■結城智子絵画展 一子供の領分-

5月9日～5月19日

Gallery FUKUTA(町田市玉川学園)

■福田玲子展

5月10日～6月9日

OMONMA TENT(取手市)

■山崎弘展

5月13日～5月18日

画廊宮坂(銀座7)

■主体ちば作家展2019

5月13日～5月19日

船橋市民ギャラリー(船橋市)

■森伊津子クロッキー展

6月2日～6月30日

高橋コミュニティーセンター市民ギャラリー(豊田市)

■11の指標展

(長沢晋一 他)

6月3日～6月8日

画廊るたん(銀座6)

■本木エツ子 展

6月3日～6月8日

ギャラリー・オカベ(銀座4)

■たましんギャラリーの作家たち

(柿崎覚 他)

6月6日～9月30日

たましんギャラリー(立川市)

■第3回藤田俊哉油絵展

-花・色・形-

6月19日～6月25日

松坂屋静岡店本館6階美術サロン(静岡市)

■大野五郎作品展

6月22日～12月8日

北区飛鳥山博物館(東京都北区)

■キリスト教美術展2019

(續橋守、中城芳裕、山崎弘 他)

6月27日～7月9日

銀座協会東京福音会センター(銀座4)

■中嶋 修・横浜にぎわい座を描く

7月1日～7月31日

横浜にぎわい座(横浜市中区)

■第41回グループ「風」2人展

(塚本照子・田中和枝)

7月2日～7月30日

フォレスタビルズ2Fロビー(豊田市)

■日本ガラス絵協会会展

(浅野修、中城芳裕、中村輝行、山本靖久 他)

7月8日～7月20日

Gallery 一枚の繪(銀座6)

■第25回「時のかたち展」

(中嶋修、結城智子 他)

7月9日～7月15日

横浜赤レンガ倉庫1号館2F(横浜市)

■第10回記念Water Color 千葉

(保坂 淳 他)

7月9日～7月15日

千葉県立美術館 第4室(千葉市)

■第2回HOMURA展

(梅沢洋子、嶋村有美子、前山陽子、三橋編弓 他)

7月11日～7月16日

上野の森美術館別館ギャラリー(上野公園)

■画廊宮坂35周年記念

現在・過去・未来 3号170点展

(石井晴子、山崎弘、和田貴子 他)

7月16日～7月27日

画廊宮坂(銀座宮坂7)

■巨大じゃかいもアート館 一般公開

(浅野修 他)

7月19日～9月23日

巨大じゃかいもアート館(十勝芽室)

■二人展

(鳩貝悦子 他)

7月22日～7月27日

Gallery 風(銀座8)

東日本震災遺児教育資金への寄付のお願い

主体展会場で販売した機関紙の売上金は、**公益財団法人「みちのく未来基金」**へ寄付いたします。今年もご協力をよろしくお願いします。

【団体名】 公益財団法人みちのく未来基金

【所在地】宮城県仙台市泉区八乙女中央5丁目10番8号 八乙女ユナイトビル2F

【電話】022(343)9996 【FAX】022(343)9997

【E-mail】 info@michinoku-mirai.org

■特集「絵画はどこへ行く…?!」いかがだったでしょうか? 多種多様なアートが展開する現代、我々の拘っている「絵画」の立ち位置はどこにあるのか、画家の言葉から探つてみたいと考えました。絵画の本質は昔から変わらない。流行とは関係なく、表面的でない懐の深さ、幅の広さが絵画だと私は思っています。
(藤田俊哉)

■来年の今頃は東京オリンピックの真っ最中です。私ははなからテレビ観戦を決め込んでチケットもし申込みませんでしたが、見逃せない競技のときは、家電量販店の大画面4Kテレビで見ようかと考えています。同じ考え方の人が集まって、パブリックビューイングみたいに盛り上がるかも。福島でも野球とソフトボールの予選をやります。また、聖火のスタートは福島のJビレッジからです。こちらもお見逃しなく。
(山田礼二)

編集後記